

「聖霊降臨日」

2020年06月01日

今年の「聖霊降臨日・ペンテコステ」は5月31日であった。「ペンテコステ」は50日目という意味である。キリストの復活から50日目に、聖霊が降臨して、ナザレのイエスをキリストと信じ、告白する教会が生まれた。そのためペンテコステを聖霊降臨日と言い、教会が誕生した日として祝っている。聖書には「霊」、「聖霊」という言葉が重要な意味を持つ言葉として、頻繁に使われている。しかし、この言葉は分かっているようで、分かり難い言葉ではないだろうか。整理して、意味と働きについて書いてみたい。

創世記は、冒頭に、天地とそこにある全てのものの創造物語を記している。「神である主は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして生きる者となった（創世記2：7）」と、最後に人間創造を記している。「命の息」の「息」がヘブライ語の「ルーアファ」で、「霊」である。人の体は土の塵で作られ、弱く、失せていくものであるが、神の息・霊が吹き込まれて「生きる者」となった。預言者エゼキエルは、平野のただ中で、枯れ果てた多くの骨の幻を見た。この骨に向かって預言すると、骨が組み合わされ、筋ができ、肉が生じ、皮膚が覆った。そして、霊に預言すると、霊が彼らの中に入り、生き返り、大軍に甦った。霊が入ることにより、命を吹き返したのである。「霊」は、神から送られ、人間に命を与え、生かす根源的な力として、位置づけられている。また、ダビデがサムエルから油を注がれ、王になる約束を受けた時、「サムエルは油の入った角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油を注いだ。この日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった（サムエル上16：13）」と書かれている。霊は神の導きとして捉えられている。新約聖書においては、悪霊が人を神から引き離し、苦難を負わせるものとして、描かれているが、主イエスが悪魔から試みを受けるために、「霊に導かれて荒野に行かれた（マタイ4：1）」と書かれているように、霊は神の全き導きと受け取ることができる。

この「霊」が「聖霊」として、決定的な意味と働きを示したのが、ペンテコステの聖霊降臨の出来事である。復活した主イエスは弟子たちに、エルサレムに留まり、神の約束を待ちなさいと言われた。ペンテコステの日、弟子たちは集まって祈っていると、激しい風が天から響き、炎のような舌が一人一人の上に留まった。神が約束した聖霊が降臨したのである。その時、弟子たちは霊が語らせるままに、他国の言葉で語り始めた。彼らは聖霊に押し出されて、神の偉大な業について語ったのである。その神の業をペトロが代表して説教している。それは、旧約聖書で預言されていた救いは、ナザレのイエスに現わされた。この方は十字架で殺されたが、復活させられ、神の右に上げられた。私たちはこのことの証人である。「だから、イスラエルの家はみな、はっきりと知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけたイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです（使徒言行録2：36）。」集まっていた人々は、イエスをキリストと信じるようになり、その信仰にあって、言葉と心の通じ合うキリストの教会が誕生した。「聖霊」は、イエスをキリストと信じ、告白させる。パウロは、Iコリント12章3節bで、「神の霊によって語る人は、誰も『イエスは呪われよ』とは言わず、また、聖霊によらなければ、誰も『イエスは主である』と言うことはできません」と書いている。聖霊が、ナザレのイエスを主キリストと信じさせ、恵みの救いを認識させるのである。「霊」は命の源、神の導き、そして、「聖霊」は父、子、聖霊なる三位一体の「聖霊なる神」で、キリスト告白をさせる神ご自身である。私たちの信仰生活は傍におられる聖霊によって導かれ、救いを得ているのである。